

フリーという名の荒野に消えた有元利夫 (1946.09.23.~1985.02.24.)

筆者が有元に出会ったのは、1973年4月1日のことだった。この日、筆者が就職した広告代理店に、藤原伊織同様、有元が同期で入社したのである。研修のグループは異なっていたが、新入社員のリストには出身大学と年齢が載っており、滑ったり転んだりを繰り返した筆者が最高齢の29歳。有元は4浪して芸大へ入ったとかで26歳、他にも27歳の高齢者はいたが、共にいわば際立った高齢者で、リスト上ではよく目立っていたのである。しかし芸大のように極めて高度な技量を要求する大学では3浪4浪はむしろ珍しくもなく、そういう点では有元もこと芸大においては通常の範囲内だったと言える。そもそもこの会社を筆者が志望したのも、年齢の制限がなく、新卒なら応募できるということを受験した次第であった。有元もそんなものだったかもしれないが、彼は芸大卒であったから、とり立ててサラリーマンの道を選択する必然性もなかったように見える。それよりも彼はこの年、芸大の仲間だった渡辺溶子と学生結婚をした。彼女は彼の卒業制作にも、よき助手として力を発揮し、有元の卒業制作は芸大に買い上げられている。それはさておき有元は、確実に生活費を稼ぐことが出来る道を、選択することにしたのだろう。

さて有元は筆者と同様に戦中生まれである。両親は当時岡山県の津山に疎開しており、彼はこの古都で生を受けたものの、3ヵ月後の1946年の末に疎開地を離れて、東京谷中に戻った。両親は文房具店を営んでおり、特に絵に多く触れるとか、兄弟が画家とか言うこともなく普通の家庭で育った。しかし彼の通っていた小学校は、芸大に隣接していたせいか、美術教育に熱心で、ここで多くの絵画に出会うようになった。当時の彼はもっぱらゴッホが好みで、この傾向は中学へ行っても変わることがなかった。しかし次第に年齢と共に印象派全体へ関心が広がり、高校に入ってしばらく経つと、絵画への道を進む決心をするようになっていった。彼が4浪したのも、そもそも芸大へのスタートが、遅れたからなのだろう。

さて筆者が彼と会話を交わすようになったのは、ともに制作部門に進み、そこでの研修が始ってからのことであった。制作部門はいわば芸大閥で、デザイナーの殆どが芸大出身者で、ビジュアルデザイン科卒だった。陶芸とか漆とかは、親の後を継ぐとか、また日本画とか洋画などの部門は、大志を抱いてその道のプロに進むか、学校の先生になるというのが、お決まりのコースだったようだが、ビジュアルデザインは、広告代理店や出版社、制作部門を重視する化粧品会社、広告部門を持った大手製造会社などでも広く採用があったから、いわば安全パイだったのである。芸大では入学式の総長訓示の中で、『ここに入学した新入生のうち数人しか、プロの中で生活してゆくことはできない』と言うことも、しばしばなのだそうだが、芸術の道というものは、それほど厳しいと言わざるをえないのだろう。

有元の新社員時代は、あまり目立った存在ではなかった。早く家庭を持った

ために、家庭に対する配慮や、自分の目指す絵の道が確固としてあったためか、会社で遅くまで残業するでもなく、淡々としたところがあった。そんな彼は1976年4月にサラリーマンをやめた。芸大の非常勤講師への誘いもあり、そろそろ画業一筋で身を立てる覚悟が出来てきたのだろう。とは言っても画家になって飯を食うと言うのは並大抵のことではなかったと思う。彼が、社を去った翌年の正月、筆者は彼に年賀状を出した。すぐに返事が来て、恐ろしいほどの達筆で、『フリーという名の荒野を一人、さまよっています。』と記されていた。この年賀状はしばらく大切に保管してあったが、その後筆者が引越しを数回繰り返しているうちに、どこかに紛失してしまった、今から思えば大変に残念なことをしたものである。

有元が一躍、社内外に名を馳せたのは、1978年の第21回安井賞特別賞受賞のときであったろうか。退社直後のことだったために、同期の人間も、彼の周辺の職員も、彼の存在を忘れてはいなかったのである。彼は入社以来しばしば芸大時代からの親友で、同じ代理店に就職していた箕浦と二人で、個展を行っていたから、筆者もお付き合いで見に行っていたが、こんなに早く大賞を受賞するとは。正直思っても見なかった。しかもこの大賞は安井賞始って以来、大もめにもめたらしい。そこで特別賞の別枠が作られて、授賞する運びとなったと聞いている。安井賞21年の歴史をいわば塗り替えたのが有元だったわけである。もめた理由は彼の画風が、現代美術の具象画という範疇に入るか否かではなかったかと、筆者は推測している。というのも安井賞とは安井曾太郎画伯の画業に基づいて、現代美術の具象画家の発掘と育成を行う趣旨のもと設定されたものだからである。その後この賞は40回まで行われたが、当初の目的が達成されたとして、終了したのだった。

ご承知のように安井賞は絵画界の芥川賞みたいなもので、新人画家のいわば登竜門だったから、おいそれと受賞できるものではなかった。しかも有元は1981年にはさらに第24回安井賞を受賞し、不動の地位を築いて行った。

彼の画はフレスコ画と言って、中世キリスト教の宗教画にその根源を求めるものであった。油絵のように、筆先で絵の具を重ねてゆくのは異なり、もともとは日本画の材料でもあった岩絵の具や顔料を色材として用い、これにアクリルや膠を媒材として混ぜ合わせてキャンバスに重ねて行くものである。これは油絵などとは異なり、かなりの体力勝負であったと思う。その上彼はこの岩絵の具を自分で作っていた。沖縄に行って珊瑚を拾うと、これを乳鉢でこすり粉状にして、これを原料にアクリルや膠を混ぜ合わせる。ヨーロッパに旅行すれば道端の小石を拾って、同じように一日がかりで乳鉢でこすって原料を作り出すのである。しかし彼はこの思い出多い珊瑚や小石に、ことのほか愛着を感じていた。そしてその愛着が絵画へ反映されていったのである。しかし彼は30歳の頃から腱鞘炎に悩まされることとなった。右手を酷使しすぎたのだろう。もともと器用だった彼は左手を使って、日常の殆どの作業はこなしていたようだが、さすがに絵を描くことは

難しかったようで、後日、『自分は頭脳で絵を描くのではなく、右手が考えて絵を描いてくれていたようだ』と述懐している。

ともかくこうして彼はこの中世の手法に没頭していった。ただ彼は絵画にのみヨーロッパ中世への足がかりを持ったわけではなく、音楽の面でも中世バロック音楽に浸っていた。そして絵の中から音が染み出てくるような世界を描きたいと考えるようになっていたのである。このために有元は芸大の音楽科の友人からも、その方面のことを学ぼうとしており、バロック時代の縦笛ブロックフレーキを自分なりに吹いていた。有元はそこに大きな安らぎをも見出していたようである。従って彼の絵画での目標も、フレスコ画とバロック音楽との融合であり、調和であった。このため絵の中にも心の安らぎとバロックの音を求めた。これこそ有元以外の画家が探求すらしなかった世界ではなかったろうか。そして彼自身の目標は魯山人の言葉にある、雅、放胆、枯淡、稚拙、鈍、省略、不整美、無名色、無造作と言うような要素を自分の作品の中に持つことだと語っている。また有元の魯山人との出会いは、彼に大きな足跡を残すこととなった。日本文字の美しさ、それに大和古印が本来持っている材質の美しさとその魅力に取り付かれて、篆刻を始めるようになったのである。同時にこうした彼の深い思想は、彼の妻であった容子夫人が、日本画家として、また陶芸家として活躍していたことと無関係ではないのかもしれない。彼自身も晩年陶器に興じ、自分で使う食器などの焼き物を手がけている。しかし彼はこの物を作る喜びには浸ったものの、出来が良くないと、言って、それが自分の見る目が肥えて来たためなのか、それとも衰退したためなのかは分からないとして、若かった頃、何にでも感動できた日々を懐かしんでいる。

また彼は「平家納経」の世界や「古仏」の力強さや躍動感にも、ひとかたならぬ敬意の眼差しを持って見ていた。彼のアートはこうした日本伝統の感性を原点として、ヨーロッパ中世の芸術を身につけた画家として成長していったのである。

しかし有元の行動半径はここにとどまることはなかった。大学で講師をするかたわら、銅版画のエッチングや石版画、自宅に帰っては、油絵や音楽の作曲など多方面にわたっていった。後に銅版画集はたびたび発行され、石版画集も発行されている。その上、暇を見つけては木彫で人形を彫ったりもしていた。彼はこうすることで、自分の絵画の中に、奥行きと同時に、大きな間口を見出そうと模索を続けていたようにも見える。しかし作曲の方はあまりモノにならなかったようで、結局彼のイメージをプロの作曲家、田鎖大志郎氏ととことん語り合い、有元の描いていたイメージを田鎖氏のハートに受け渡す形で、やがて作曲、録音へと進展し、彼の念願を果たしたのである。

しかし有元は1979年7月1日の日記の中で、『ほんとうの意味で、自分の納得の行く作品などというものは、毎日描くという生活の中から、せいぜい1年に20点が限界のようだ。その中に2点かそこいらまあまあ本物があると言ったもの

だと思う。力づくに、描きたいとかどうだとか言うような気持を無視して、力づくで毎日毎日描いてそんなものと思う。』と記しており、さらにその月末の7月31日には一言『本当の力が欲しい』と書き残している。この年、有元は銅版画集『7つの音楽』を発刊し、12月にはこの記念展も行った。しかしその心に去来するものは、決して満たされた心ではなく、アートとは何かという根本理念を見つめることに苦悩していたように見える。それは同時に芸術家という目標を持った者が、常に落ち込んで行く大きな大きなブラックホールであったのかもしれない。これこそ芸術家として乗り越えなければならない、試練だったのである。そして同年9月25日の日記には『芸術家にとっての新しい意匠は、自分の属する時代への抵抗であり、それは思想からも、形式からも湧き出るものである。そして多くの芸術家は、自ら作り出した抵抗としての意匠に埋められて、芸術の本質を失う。しかし、時代の意匠を通ることなしにはその時代の新しい芸術が生まれないと言う事も又事実である。』と記し、新しい時代の何かを求めて、有元は画家としての基本であるデッサンへとめりこんでゆく。

1979年11月14日『ここ数日落ち着いた制作が出来ないでいる。容子の父親の病気のこともあるし、雑誌の仕事のような、不なれな仕事のせいもある。＜中略＞そんな中でデッサンをすることが、比較的うまく進んでいるようだ。絵をスタイルとして考え、それを変化させようとする事はまちがっている。僕の場合、イメージした空間、人物によって、イメージした以上のドラマを生みたいわけだけれど、結局そこで問われるのは"描く力"なのだ。描く力といっても描写力ではなく、根本において目に見えたものではあるけれども、それを記憶の中で一度象徴化した物みたいな、そんなリアリティなのである。そのようなものをドラマを構築すると言うよりも、エレメントそのものをただ、ただ描いて描いてみる。それも出来るだけ単純な素材と色で、"効果"の可能性をとれるだけとれば、"描く力"はハッキリ見えてくる。そしてその力が一步一步進むことにおいてのみ、自然なスタイルの変化はやって来るにちがいない。音楽を聴いたり、何かをする中でドラマのイメージを感じた時、そのイメージのキッカケをさがす。その先は全部"描く力"がやってくれるのだ。一日中その力を養ってゆくことだ。』と記して、『いろいろな材料が持つ効果からできるだけはなれて、シンプルに描くことに集中してみたい』とも語っている。さらに『デッサンはタブローの下書きではない』とも言っている。

『線の持つ調子とフォルムだけで成り立った絵画的なもの』そして『将来1980年代の終わり頃、自分がどんなデッサンを描いているか、大いに心細い気はするけれども、とりあえず10年間、アセリとのんびりとをないまぜにしたような気持ちで、とり組んでゆくつもり』と語っているのである。

有元はさりげなく言っているものの、ここには彼の不退転の覚悟があったように筆者には見える。有元利夫33歳の覚悟とも取れるのである。そして残念なことに

1980年代の終わりまで、彼は人生を歩み続けることは出来なかった。

しかしこうした有元の音楽を意識した絵画作りと確かなデッサン力に裏づけされた絵画は、やがて大きな結果として表れるようになっていった。彼の描いた絵画が、商品としての価値を見出していったのである。人々の心を癒す安らぎが、人々の心を捕らえるようになった。1979年12月10日から始った2年ぶりの個展は好評だったのである。彼の求めていたシンプルさが好感を持って迎えられた。しかし彼はこれに満足することなく、『二年前と比べて作品はどうだろう。描くことにおいてやや着実な成果はあるものの、荒々しい力強さは(もちろん優美さの中に)失われているようだ』と日記の中に記した上で、『絵画の目的は自分の感性のできるだけ確実な表出にしかないのだ。マチガエルナ!!』と自らを叱咤激励し、『ここ5年とりあえず今年1年何が何でも頑張り通そう』と決意しているのである。

しかし彼のこうした自己矛盾や葛藤に反して、彼が個展をやるたびに確実に収入へ結びついたばかりではなく、画商の間でも大きな話題を獲得するようになり、画商が彼の作品を督促するほどになって行った。そして有元もこの要求に対して真摯に応えていった。

その上有難いことには1983年10月19日。長男有元利彦が誕生した。3,100gを超える立派な男の子だった。彼が喜んだことは言うまでもない。仕事も順調で、経済的にも安定していた。彼の自己矛盾とは無関係に、絵を描けば必ず売れる時代が続いていた。画商は彼に対して督促の手を強めて、ひたすら描き続けることを求めた。彼はやがてアルコールに頼って、自己矛盾を解決しようとした。彼は芸術の中にそのフィロソフィーを模索し、また一方で芸術の中にアーキテクチャーを実践していったのである。アトリエでは音楽をかけて描き続けた。バロック音楽であった。しかしこうした生活が次第に彼の身体を蝕み始めていた。1984年ベッドが空き次第正月そうそう検査入院することが決まった。彼は『多少の障害はあっても、通常の仕事ができるようになりたい』と願った。

そして『10月展覧会も一応今回でくぎり。これからは少しじっくりと仕事をしよう。体調のほうはハッキリしない。胆ノウに何かあるのかも……。ここ一月ぐらい数値上がりぎみで、わき腹から背中にかけても、わりあいハッキリしたいたみを感じる。やっと何とか自分のペースを作り、作品的にも自分を見付けつつある所だ。ゆっくりでいいから、仕事をしたい。五年をひとくぎりにして二回、10年やればある程度の作品を作れるのでは、などというキタイを持っている。』

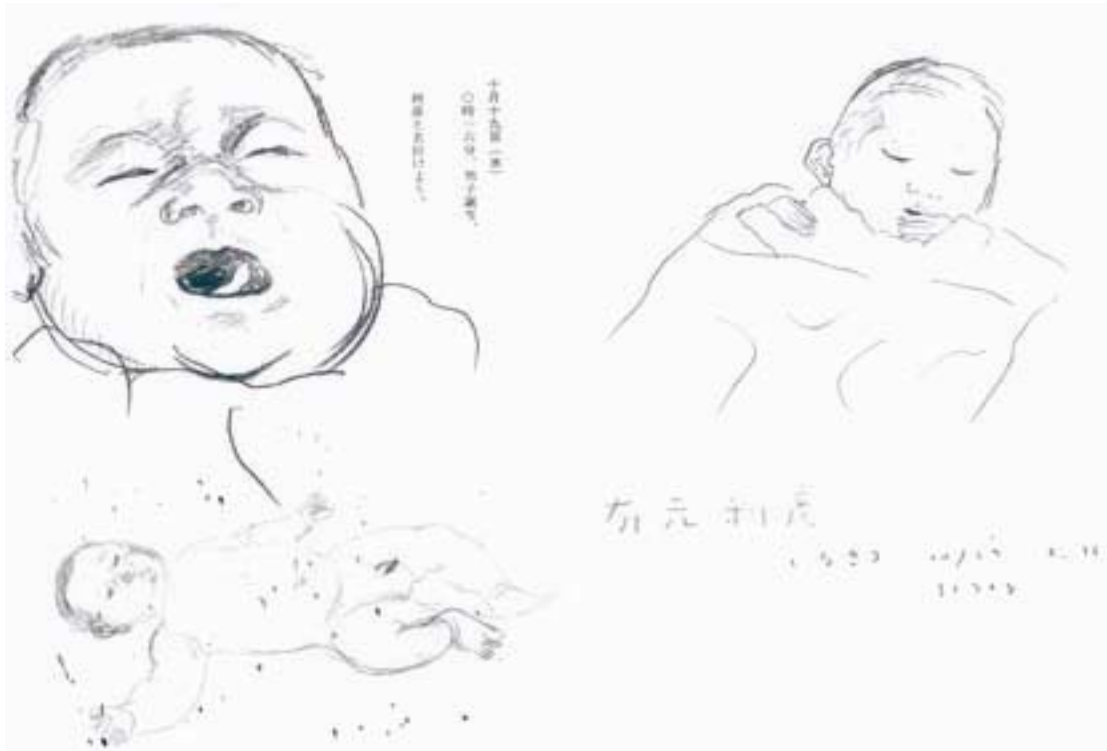
しかし彼のキタイは不運にも達成されることはなかった。同じ芸大の同窓生から有元が病に伏したと言う話を聞いて、筆者もお見舞いに行かなければと思い、この男に病院名を尋ねたところ、「行かない方がいいかもしれない。君の自己満足になるだけで、彼にはプラスにはならないだろう。」と諭された。それから間もなく彼は世を去った。1985年2月24日39歳の若さだった。肝臓癌だった。

長男が生まれてからまだ1年半しか経ってなかった。あまりにも早すぎる死だった。何でそんなに死に急ぐんだろうと悔やまれてならなかった。彼の芸術哲学と描写技術が、やっとのことで接点を見出そうとしていた矢先に、何故、死ななければならないのかと思った。まだまだ遣り残したことだってあるだろう。家族のためにも、彼自身のためにも、芸大のためにも、そして日本の絵画界のためにも……。だがすべての愛惜に、もう誰も応えてはくれなかった。同年2月26日彼は茶毘にふされて、芸術とは何かを追及し続けた生涯を閉じた。あまりに悲しい死だった。容子夫人と利彦君だけが取り残された。このご長男も今では30代になられているはずである。ご長男は20歳の頃は画家を目指していらしたようだが、今はどうされているか筆者には分からない。しかしどこかで父上を超える画家になってほしいと思う。父の400点に満たない作品では、誰しもが満足できない。この続編を期待したら、ご長男に申し訳ないだろうか。

ところで有元の画風は現在芸大の美術学部デザイン科教授で、有元の親友、箕浦昇一先生に受け継がれていたが、箕浦は2016年5月11日逝去された。前述のように若い頃は一緒に『二人展』を行っていた。やはり筆者とは同期入社した仲間である。その二人展に何回か足を運んだ記憶がある。有元の絵をちょっとヒョウキンな仕草にしたような箕浦先生の絵が、ともに並んでいたのを今でも思い出す。時は流れて、有元が亡くなって既に30年以上が過ぎた。彼が生きていたら、もう70に手が届く。どんな絵を描いていたろうか。きっとバロック音楽が聞こえてくるような絵だったろうと思うと、残念でならない。3年後の33回忌に、筆者が元気でいられたら、彼が青春時代を過ごした谷中へ行って、菩提寺である長久院に詣でて見たいと思っている。筆者に残された日々もそんなに永くはない。フリーという名の荒野で、有元よ、しばし待っていてくれ。



上は容子夫人像。下は有元の長男利彦像。家族を愛した有元の生き様がそのまま伝わってくる。



1984年1月1日、日記のコピーである。長男を授かって数ヶ月、彼自身の身体に異常が現れ始めていた。横たわる人物を黒く塗りつぶして、有元の心の苦しみが伝わってくる。そして1年数ヵ月後、有元は返らぬ人となった。我々は大きな魂をまたひとつ失った。
 ※有元の日記等は [新潮社刊「もうひとつの空」-日記と素描-有元利夫]から引用したものです。